

《研究余滴》

「弘郎察辞範」成立について

で行なわれる年中行事のうちで、特にその時期特有なものをテーマに選び、時間的に配列してあり、こうした時間の流れの意識が、右の「貞文歌合」と共に、「古今集」四季巻の緻密な時間的配列へと流れ込んでいったものと、考えられる。

以上、「古今集」四季巻に至るまでの成長過程をたどってきたのだが、それによると、漢詩における題詠形式が和歌に取り入れられて、季題をテーマに詠むことが、酒や音楽を伴う風流な宴の場で行なわれるようになり、季語的意識が芽生え成長して、万葉集巻八や巻十、及び平安初期の漢詩集である「文華秀麗集」に四季の移推通りの配列形式を生み出し、季題もさらにふえ、歌合をしておおろくは屏風歌等を経て古今時代に至り、古今集がそれらの時間意識、及び季題意識を意図的、かつ創造的に摂取したということが言える。

視点をかえて言えば、万葉の素朴な実景を詠む態度から、歌合・屏風歌等にもられるように、四季折々にわたる題を与えられ、その情景を頭に浮かべ、眼前にない自然を想像で詠む、観念で詠むという人工的な態度の発生と成長の過程といえ、これが、古今の特徴的歌風の一つである観念的という批評につながっていくものと思われる。

長崎のオランダ通詞六名が幕命でフランス語学習を始めたのは文化五年（一八〇八年）二月のことで、直接の動機としてはロシア船が残したフランス語文の書簡をオランダ商館長ヘンデレキ・ドゥーフにオランダ語に訳してもらい、それが開港・通商を迫る内容のものであると知って、フランス語の国際的重要性を認識したことがあげられる。通詞のひとり、本木庄左衛門はドゥーフの指導をえて本邦最初のフランス語字

書『弘郎察辞範』四冊を編纂したが、この完成年月については明確なところが判らな。一昨年、文部省科研費の助成をえて綜合研究（黎明期の日本仏学史研究）に携った折に、長崎市立博物館所蔵の『弘郎察辞範』を複写する機会に恵まれた。

「弘郎察辞範」の題言末尾には、

曆數一千七百七十五年鐘版

西洋 大儒官 批溥耳麻林著

和蘭 加比且 頭地方踞讀和桴口授

大日本 和蘭家譯 長崎 本木正榮等奉

謹譯

と記述されている。原著者ピーテル・マリンの蘭仏対照字書を底本としてドゥーフの指導下に本木が中心になって編纂したのが『弘郎察辞範』であるが、この字書は、
un bel homme カオベオキム 美男

というようにフランス語発音を片カナで表記している点で注目されるが、実際にはすべてが発音されているわけではない。四冊本のうち三冊目の三分の二までに発音表記があるにすぎない。これが問題である。なぜ全編発音をつけていないのか。多分全編に発音をつける意図で編纂し始めたのだから、ある事情からそれが出来なくなったのだとみるべきだろう。理由としては口授者ドゥーフの帰国である。ドゥーフの帰国（文化十四年十月）のために発音表記が不可能になったのであろう。邦語訳をつけるのは蘭仏字書からでも可能だが、発音となると本木たちのフランス語の力だけではむずかしい。結局、『弘郎察辞範』の成立はドゥーフ帰国後と考えられるのであるが、その正確な年月はやはりきめがたい。

（富田 仁）